郷土史話㈢

佐伯の洞穴とその居住性

羽柴　弘
（会員・佐伯市龍護寺）

佐伯は洞穴の多いところで、その殆んどは石灰洞穴である。それは、石灰岩の大岩脈が、東北彦岳の麓狩生付近からはじまり、西南本匠村堂ノ間に向って約五〇キロ、幅約四〇〇㍍にわたって白くかがやく岩峰、河岸近くの岩壁や断崖、すばらしい景観の連続である。

その石灰岩脈は、弥生町長畑付近から椿山の南を経て、番匠川の北岸に沿うて本匠村小川橋に至って、対岸の米花山にも及び、小半橋付近で斜めに交差し、上流因尾川ではその対岸に広がっている。この岩脈のあるところには高低到る処、さまざまな石灰洞穴があり、どうも私共の遠い先祖たちが、とくに狩猟生活時代にその洞穴を、住居として利用したと思われる。

そこで今回は、郷土史話の古代篇とでもいえる、太古以来これらの洞穴を見つけて、住居として用いたのではないかと、以下あげる数か所の石灰洞穴を検討して見たい。何かのご参考、お手引きにでもなれば幸いである。

①狩生鐘乳洞

彦岳（六三九㍍）の南山麓、狩生（かりゅう）から一キロ半のところにあるこの鐘乳洞は、国指定の天然記念物であるが、鐘乳洞としてはあまりパッとせず、見学者はほとんどない。ただ有名なのは、洞内という特殊な環境に適応した、珍しい真洞性動物が生息していることで、大分県指定の天然記念物として保護されている。

彦岳登山道から、谷川沿いに五〇㍍ほど登った山腹に、東に向って開口している。入口は巾一㍍、高さ四㍍ほどの石灰岩の大亀裂（だいきれつ）である。洞穴の外は緩い傾斜で、谷川も近いが、居住性はよくない。しかし入口から洞穴にか

けて、寒暑を避け雨露を凌ぐことが出来るので、古代人が利用したであろうことは、容易に想像出来る。

ここから数百㍍の高所に、すばらしい新洞がある。それは昭和の初年、海崎のセメント会社が原石山として、石灰石採掘中に発見したもので、観光資源として将来性がある。ただし公開していないので実景を見た人は少なく、もちろん昔の人の全く知らない地下の秘境である。

② 宇戸洞穴

右の新洞と背中合せの位置に、古くから知られている「宇戸の穴」がある。そこは佐伯市戸穴の宇戸の奥約七〇〇㍍、宇戸神社の横を流れる小谷から三〇㍍ほどの高さ、社叢におおわれた石灰岩塊の下部に、西南向きに開口している。

入口は二㍍ほどで、岩庇の格好をなし、洞穴の深さは十数㍍もあるが奥は低く狭くなっている。しかし洞口に近いところは畳数枚が敷けるほど、一部には収穫物を置くにふさわしい、自然の岩棚まで備わっている。難をいえば天井が少し低い。

今は樹林におおわれているが、古代は恐らく神社もなければ森もなく、西南向きで土地は高燥、谷水は近いし、それに加えて裏山を越せば狩生の野である。北に登れば彦岳に通ずる尾根がすぐで、狩猟生活については最上の地であるといえる。

少量の木や茅の材料を使えば、容易に入口に扉をつけて、尾根を越してくる寒風をさえぎることも簡単である。数人の家族の穴居生活の場としては、最高の場であると考えられる。

洞穴地床は粘土で固まっているが、その地層中には必ず何百年前何千年前の、生活の遺物が包含されているにちがいない。厳重に現状のまま保存すべきである。

地名の「宇戸」は洞穴を意味し、本匠村井ノ上にも宇戸神社があり、有名な宮崎県の鵜戸神宮は海食洞穴である。戸穴の地名も「上古穴居時代の遺跡存在するに因るもの」（『佐伯志』佐藤鶴谷）とあるが如く、いずれも洞穴が古代人の生活とつながるものである。

③ 白谷洞

白谷洞は、県道因尾線の途中、本匠村の入口、鬼ケ瀬の淵に注ぐ白谷川の西岸にある、佐伯地方では最大の洞

穴である。県道から三〇〇㍍程の左手、屏風を立てたような石灰岩壁の下部、林道のすぐ上に洞口が開いている。

享和三年（一八〇三）に出来た『豊後国志』（唐橋世済編）には、おおよそ次のように出ている。（原漢文）

白谷洞　山崖ヲ登リテ洞ニ入ル。洞戸僅カ二三尺許リ、内ノ広サ方八九丈、高サ三丈。上方ニ岩ノ破レアリ、窓ノ如ク天光ヲ引ク。石壁白色、玉ノ如シ。明潔賞ス可シ。内ニ二穴アリ。一ハ立チテ歩クベク、一ハ俯シテ入ルベシ。並レモ其ノ深サヲ知ラズ。

洞内の地床は向う下がりの緩い傾斜であり、入口はせまいが自然の天窓があり、広さも広し、少なくとも数家族の居住に適する。開口部は東向き、白谷川まで三〇㍍の便利さである。

この洞穴は通称「こうもり穴」といい、洞内にこうもりが群居していて、少年たちが喜んで探訪するところである。

なおついでに、『豊後国志』の編さんに当り、番匠川流域筋の現地踏査は、田能村孝憲（後の画聖竹田）が分担しているので、前掲の文章は竹田の踏査記録であると考えられる。

④ 聖嶽洞穴

本匠村大字宇津々にあって、村役場から約一キロ小川沿いにのぼったところ、両岸に石灰岩壁・岩峰がそそり立っている。右手上方三〇〇㍍ほどの高所、岩襞にかくれて、この聖嶽の入口が開いている。道路からその位置を指示することもむずかしい。歩いて登れば三十分はかかるであろうが、急坂の山道を登り、樹林をわけてやっと洞口に達する。

地名としては「ヒジリダキ」で、洞穴中に昔聖者が住んでいて、その骨が残っていると伝承されていた。昭和三十六年（一九六一）洞内の学術調査が行なわれ、「聖嶽古人」の頭骨は、今から一万数千年前のものと推定され、別府大学賀川教授によってその調査結果が示された。

私はここでは聖嶽洞穴の居住性から考えて、古代人が果してこの洞穴内で生活していたか、大いに疑問に思っている。

「聖嶽古人」の太古は別として、古代ー中世ー近世とたどった歴史時代、そこは人の住めるような場所ではない。第一に三、四〇〇㍍の高い所に、洞穴は西に向って

斜めに開き、あたりに平地は全くなく、通過地とも考えられない。一歩洞内に入ると三㍍程の崖が低く下降を妨げ、洞内まっ暗で降雨期は別として水がなく、谷に降りるのが大変である。したがってこの聖嶽は、古代人の住居跡としては納得出来ない。むしろ逃避洞穴（かくれが）として、時たま利用されたのではあるまいか。これはあくまで現状から考えてのことで、一万数千年も昔となれば洞穴内外の変化以前であり、「聖嶽古人」を否定する考えは毛頭ない。

⑤ 仏座洞窟

米花山麓、番匠川の深淵に臨むこの洞窟は、『豊後国志』にいうように、「渓上ニ崛起シ、上ニ洞穴アリ、大キサ約丈余、形円形ノ如ク、下ニ盤石アリ、宛然仏座ノ如シ。巌足碧潭深ク蹤ママニ寄ル由ナシ。云々」と、巌窟は外周削り落として磨かれたような岩膚、手がかりも足がかりも全くなく、小舟・梯子の用意なくしては、近寄れる場所でない。従って石仏を祀る外に、俗人の居住などもっての外である。

ここから一〇〇㍍ほど上流、桟洞門の中にも洞穴があり、小半鐘乳洞の付近にも岩陰や小洞穴が多いが、いずれも古代住居跡とは思われない。しかし付近両岸のかなり高所には、石灰岩の岩塊が多く、その到るところに小洞穴や岩陰がある。長い年月、雨露にさらされて自然の溶融が間断なく行なわれ、溶かしくぼめた洞穴である。

それを古代人は利用するわけである。

⑥ 囲ケ嶽の洞穴

井ノ上の手前、因尾川の南岩に高くそびえる石灰岩峰、その囲ケ嶽の中腹ともいえるところに、樹林にぬきん出る数㍍の岩壁に、北東に向かってこの洞穴はある。天井は半ばは低いが広さは六畳敷ほど、ほぼ立って歩ける洞穴である。もちろん石灰洞であるが、鐘乳石など少ない。

ここに天正十四年（一五八六）、大友勢討伐のため北上した島津の軍勢を避けて、因尾の土民が避けて隠れたという。（『大友興廃記』外軍記に詳しい）しかしこれを知った島津勢がこの洞穴の下まで押寄せたのを、土民達は岩石や材木を落として「薩兵数百人を殺戮した」と伝えている。いわゆる「穴囲いの戦」である。文字通り信用するわけにはいくまい。

しかし、何分にも山の中腹であり、洞穴の前はけわしい垂直に近い崖であり、飲用水も近くにない。ただ狩猟や山地農耕には尾根も近いので、交通事情は悪い方ではないが、日常居住にはまず適当でない。

このあたり両岸共石灰岩地帯であるから、居住性をもった洞穴・岩陰などはいくらでもあると思える。

⑦ 前高洞

井ノ上の先五〇〇㍍前高津留の対岸に、扉風を立て並べたような大岩壁があるが、その前に前高明神の社殿と黒々と茂った社叢がある。前高洞はこの大岩壁に多くの洞口を開いている。

『豊後国志』（前出）には、田能村竹田が実地踏査にもとずいて、次のようにその説明が、きわめてリアルに記されている。

――青嶂扉ノ如ク、洞戸ノ開ク二十余穴、其ノ大ナルモノ二三ケ処、濶サ丈余、宛転其ノ深サ測ルベカラズ。下ニ碧湍湧出シ（中略）其ノ洞孔上下左右相通ジ、以テ出没ス可シ。（下略）

其の前面に前高明神の社殿があるが、それは鎌倉時代の創建であるので、それ以前は古代以来この洞穴が、人々の居住洞穴として、岩陰までを含めて数家族以上が、居住したであろうことは容易に想像される。流れは近いし、洞内の湧水も豊かで、しかも南向きである。狩猟時代から農耕生活を取り入れるころとしては、最も居住性に恵まれたところといえる。何故かなら近世以後も定住の跡があり、またルンペンが入り替り立ち替り、一時寄留するところとなっていたからである。

以上七か所ほどの洞穴を一通り考えて見たが、それはあえて石灰岩地帯のみに限らない。その北側山脈の硅岩角帯の山地や渓谷にも、岩陰や半洞穴、岩庇や転落巨厳の下など、充分雨露を避け、寒暑の凌げる安住の場所がある。しかし狩猟生活から次第に遠ざかり、農耕生活に移行するにつれ、やがて平地を求めて小屋掛けをし、または竪穴住居を営むようになったと思われる。

私はこの一篇を草するに当って、その見解に一冊の参考書も用いなかった。考古学や古代史のような文献に頼らず、もっぱら実地の踏査を基礎として、敢えて独想を試みた。偏狭な考え方や独断に過ぎる点があったら、ご寛恕と別なご見解をいただけたら幸いである。

（おわり）